龜井勝一郎全集

第四巻

講談社

亀井勝一郎全集　第四巻

昭和四十七年四月二十日　第一刷発行

定価　一五〇〇円

著者　亀井勝一郎

発行者　野間省一

発行所　東京都文京区音羽二―一二―二一
株式会社　講談社
郵便番号　一一二
電話　東京〇三(945)一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
©亀井裟子　昭和四十七年

Printed in Japan

0395-135047-2253 (0)　(文1)

龜井勝一郎全集　第四巻

編纂

河上徹太郎

中村光夫

丹羽文雄

山本健吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四卷　目次

倉田百三論

時代と青春……一三
一　人間革命のために……一三
二　日本の悲劇……一五
三　青春論……二〇
愛の哲学……二三
一　祈りについて……二三
二　友情と告白……二六
三　恋愛と性慾……二九
四　家族について……三三
五　信の愛と美の愛……三五
宗教的人間……四二
一　罪悪感について……四二
二　苦行と廻向……四六
三　病気論……五〇
政治と理想……五六
一　労働運動について……五六
二　戦争と平和……六〇
三　晩年の祈り……六四

文学と信仰

会津八一……七一
武者小路実篤　補遺……七七
岸田国士……八三
井伏鱒二……八八
河上徹太郎……九三
小林秀雄……九六
島木健作……一〇四
丹羽文雄……一一三
石川達三……一一六
後　記……一二四

現代文学にあらはれた知識人の肖像

内海文三　二葉亭四迷「浮雲」……一三九
間　貫一　尾崎紅葉「金色夜叉」……一三七
長井代助　夏目漱石「それから」……一四七
岸本捨吉　島崎藤村「新生」……一五六
時任謙作　志賀直哉「暗夜行路」……一六五
矢代耕一郎　横光利一「旅愁」……一七六
杉野駿介　島木健作「生活の探求」……一八六
鳴海仙吉　伊藤整「鳴海仙吉」……一九六
佐々伸子　宮本百合子「道標」……二〇五
大庭葉蔵　太宰治「人間失格」……二二五

文芸評論（昭和十三年――二十八年）

「青墓の処女」に就て……三二七
軍人の言葉……三二九
「龍源寺」　渋川驍氏著……三三〇
一貫するもの……三三一
まづ理想の確認……三三三
「厚物咲」　中山義秀氏著……三三三
文芸時評……三三四
贅沢な精神……三三四
従軍記一束……三三六
支那人の描写……三三七
自己の表現……三三九
評論と雑感……三四〇
自己の喪失……三四二
昭和十三年の文芸界（回答）……三四四
無　題……三四四
「現実」の頃の面影……三四七
作家論について……三四九
教育小説……三五四
文　学……三五六
序、人間再生の前夜……三五六
一、新らしき神話の模索……三五九
二、精神の危機……三六三
三、ソ聯文化への疑惑……三六八
四、戦争と文学思想……三七三
五、東洋の復活……三七七
六、ルネッサンス……三八二
七、文学者の決意……三八八
昭和十四年の文芸界（回答）……三九二

再生の歌……二九三
井原西鶴　武者小路実篤著……二九五
疑　問……二九七
無限の懐疑の悲しみ……二九九
断想二つ……三〇二
英雄詩の創造……三〇四
紀行文学について……三〇八
豪放と優美……三一三
田中英光君のこと……三一一
一月の小説（回答）……三一三
民族の犠牲者……三一三
異邦人の眼……三一四
「新しき道義」　岩倉政治著……三一〇
未完成の情熱……三一一
本年度の文学作品で好かれ悪かれ貴下の
　関心を惹いたものは何か？（回答）……三一六
文学の再生……三一七
新しき戦争文学……三一九
「曠野の記録」について……三二一
文学界後記……三二三
明治大正昭和文学における国民必
　読の作品は何か？（回答）……三二四
文学界後記……三二五
文学界後記……三二六
本年最も感銘を受けた文学作品ほか（回答）三二七
文学と信仰……三二七
亡き友へ……三二一
新しい作家……三二五
文学界後記……三二六
文学界後記……三二七
文学芳談……三二八
文学界後記……三二二
文学界後記……三二三
文学界後記……三二四
文学界後記……三二五
文学界後記……三二六
文学界後記……三二七

作家と批評家の対話……三六七
太宰治のこと……三七三
モラルの探求……三八四
古風新風……三九二
「読売文学賞」に寄す……三九五
悪童の生と死……三九六
日本の浪曼派……三九七
第二新人論……三九九
女流作家と「美貌」……三九一
幸福について……三九三
井伏鱒二論……三九六
「絶対の恋愛」倉田百三著……四〇四
文芸時評……四〇五
単刀直入の面白さ……四〇五
作家の愚さといふ事……四〇六
モデル小説など……四〇八
藤村の二面……四〇九
三つの小説……四一〇
一九五〇年の回顧……四一三
今年の文壇名作十篇……四一四
高村光太郎詩集「典型」……四一六
文学作品を通して　明治大正昭和の恋愛観……四一七
北村透谷、その反逆と憂愁……四一七
島崎藤村、その懺悔と告白……四一八
武者小路実篤、自然のこゝろのまゝに……四一九
倉田百三、神の愛と人の愛……四二〇
岡本かの子、母性と童女と魔女の恋……四二一
太宰治、その倫理とデカダンス……四二三
更に学びたい方々へ……四二三
新聞小説論……四二四
明確な人間像……四二四
大衆の愛するもの……四二六
小気味よい風刺「自由学校」獅子文六著……四二七
光輝ある青春……四二八
「唐人お吉」……四二九
「失楽の庭」中河与一著……四三〇
現代文学の空白……四三三
批評家に小説がわかるか……四三四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説に対する私の態度……四三四
作家素描……四四〇
井伏鱒二……四四〇
丹羽文雄……四四一
批評の確立のために……四四四
小説中心主義を排撃す……四四四
厳しさと面白さについて……四四五
危険な状態……四四七
作者の疲労……四四八
作家素描……四五〇
林芙美子……四五〇
平林たい子……四五一
女流文学と林芙美子……四五四
印　象……四五五
作家素描……四五八
石川達三……四五八
石坂洋次郎……四六〇
鮮かな個性……四六一
作家素描……四六三
林房雄……四六三
舟橋聖一……四六五
愛国の書二つ……四六七
戦後教養文献解題……四六八
文学・美術……四六八
作家素描……四八三
永井龍男……四八三
伊藤整……四八五
私の選んだ良書……四八七
張合ひのない小説……四八八
文学論争について……四九〇
文芸雑誌の性格……四九一
ことしの文壇地図……四九三
チャタレイ判決をきく……四九五
文学上の抵抗性……四九七
芥川賞の堀田善衛……四九九
中国の抵抗……五〇〇
独立と今後の文学……五〇一
歌集「みどり抄」……五〇三

「春の城」　阿川弘之著 …… 五〇五
国民文学私見 …… 五〇六
人気作家論 …… 五一三
石川達三の強味と弱味 …… 五一三
石坂洋次郎の〝理想主義〟 …… 五一四
舟橋聖一の下ごころ …… 五一四
教養文献解題 …… 五一六
日本文学 …… 五一六
小山清 …… 五一〇
結城信一 …… 五一一
現代文学を築く人々 …… 五一三
老妓抄（岡本かの子）解説 …… 五一四
一九五二年ベスト・スリー …… 五一五
批評の文学 …… 五一五
現代文学の思想的課題 …… 五一六
「旅愁」　横光利一 …… 五一〇
批評の新人を待望する …… 五一一
永続的なテーマを …… 五一一
分野の開拓の為に …… 五一三
「暗夜行路」　志賀直哉 …… 五一五
解　題 …… 五一七

倉田百三論

時代と青春

一　人間革命のために

倉田百三――。宗教的人間の肖像、その形成と変貌の諸相について。これが私がこの評論で語らんとした主要なるテーマである。すべて作家論の目的は、その作家が自己の生涯に向つていかなる問題を提出し、それをいかに解決しようとしたか、その道程の固有性を摘出して、これを再現するところにある。自己の生涯に向つて提出した固有の課題こそ、その作家の宿命であるからだ。私は作家といふ言葉を用ひたが、倉田氏は作家である以上に、むしろ宗教的人間であり、その面が主要なものと考へられるが、しかし私がこゝに用ひた方法は、いま述べた如く作家を語る方法によつた。そしてひとりの宗教的人間の肖像画を描かんと試みたのである。

私はかりそめの主義や思潮によつて、一人間を定義づけ、限定することを好まない。夫々の作家については、自然主義とか人道主義とか浪曼主義とか様々の名称が附せられてゐるが、名称はすべて虚仮にすぎぬものである。いかなる先入見や偏見ももたずに、虚心に対象にふれるべきだ。名称として称すべき相なき、云はば無相の相において一人間を見るべきである。たとひそれが混沌をもたらさうとも、むしろそれが当然なのだが、無限定の混沌の裡に、おのづから結晶して行くその人の運命の星を待つべきであらう。

また私には、私固有の念願と問題がある。自分の心底をたづねて、その固有の欲求をみつめ、欲求の最高部門において先人に接するのが、最も合理的態度であらうと思はれる。私はかゝる意図のもとにこれをかいた。したがつて、あくまで「私の倉田百三論」である。私によつて描かれた一つの肖像画なのである。これを参考としつゝ、読者は各人の裡に、夫夫の肖像をうち立てる自由をもつべきである。

私は倉田氏の選集を読みつゝ、また自分の欲求にも即して、こゝに一貫せる一つの主題を求めた。それは、人間はいかにして本来その在るところのものと成るか、云はば人間の誕生あるひは再生と云つてもよい。人間革命の進行といふ面で、宗教的人間の形成され行くすがたを主題としたのであ

る。これは現代日本人としても、必至の問題であらう。倉田氏の現代に生きる道も、おそらくこゝにある。

敗戦日本に課せられた最大のものは、云ふまでもなく民族の再生といふ課題だ。それは外部から与へられた民族主義に由るのではなく、民族を構成する個々人の、自発的な念願によつて支へられてあらねばならぬものである。敗戦に基く社会革命は進行しつゝあるが、これを決定づけるのは人間革命である。各人の自由意志から発した自己再生の祈りなくして、社会革命は決して意義あるものとはならぬ。

現代の世界状勢、国内状勢はたしかに未曾有の危機にある。冷い戦争はすでに開始されてゐる。思想の混乱は更に増大するであらう。かやうな時、我々はともすれば眼を外部にのみ向けやすい。その時々の政治状勢や思想潮流に左右されて、極めて浅い転身が行はれがちであることは、戦前、戦時中、戦後を通してはつきりみられた日本人の弱点であつた。いま最も大切なのは、自己の内面を凝視する眼だ。隠された己の内部をみつめて、自己本来の要求をさぐり、そこに忠実に、堅実に、自己を形成して行く努力こそ最も必要であらう。それは自己ならざる自己を、云はば空想的自己を破壊する努力でもある。我々が戦時中に犯した多くの迷妄罪過から、再び生れ変つて、新しき生を築くための革命こそ真の革命と云はなければならない。

政治経済状勢については、大声で論じてゐる論客が少くない。党派的争ひも激烈である。しかし、声をひそめて、ひとりひとりの胸底にさゝやいてくれる衷心の声こそ、今日最も欠けてゐるものではなからうか。危機は外部にのみあるのではない。最大の危機は我々の人間性の裡にある。自由の敵は外部にのみあるのではない。小心翼々として他人の眼を恐れる自己の脆弱さそのものこそ、むしろ自由の敵であらう。

自由人とは、自ら迷ひ苦しみながら、しかも己を欺くことなき判断を下さんとして、且つそのことに責任を感ずる人間のことだ。あらゆる種類の党派から独立して、唯ひとりにおいて確乎たる思索を深めようと志す人間のことだ。もとより至難の道であるが、かうしてのみ人間は人間と成るのであり、それがいかに困難かを体験するところに成長がある。倉田氏の著作は、この点で青年にとつては絶好の導きである。現代の危機、人間的危機の時代において、再び氏をかへりみるならば、無限の教訓を発見するであらう。

時代、それはいかなる時代であつても、危機の時代ならざるはない。人間の生存そのものが不安定で危険多きものである。己の内面を凝視する能力の欠如は、これを外部の環境になすりつけ易いが、我々は決して環境の奴隷であつてはならぬ。強き精神は、自ら大きな障碍を設定するものだ。あたかも強き肉体を鍛へるためには、様々の障碍物が必要であるや

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com